

日中関係に果たした役割再確認

愛大東亜同文書院 大学記念センター 10周年でシンポ



書院と卒業生が果たした役割を話す小嶋氏

2人を招いて書院とその卒業生が中国とのようにかかわり、日中関係に果たした役割を再確認した。

書院は、1904年の第1期生から終戦の1945年までに約4900人の卒業生を送り出した。

小嶋氏は、外務省に入り、中国をはじめ各国大使館を回ってモンゴル、ルーマニアで大使を務めた。同日は「東亜同文書院出身者と日中関係」のテーマで話した。

小嶋氏は「太平洋戦争が始まる直前まで中米公使を務め、戦争回避に努めた若杉要や中国を理解し、日本軍を送らないよ

う頑張った石射肇太郎、素晴らしい外交官を輩出している」と国際平和を願った外交官を紹介した。学歴では、中国問題研究の学者を数多く輩出、後の中日大辞典編集や東

洋史研究、東洋哲学研究の権威になった卒業生が多く、日中の文化交流を推進したほか、新聞、雑誌など言論界で活躍した先輩、経済交流を進めた経済界の卒業生を列挙し

た。特に文化大革命当時の壁新聞報道では、国内新聞社9人の特派員のうち4人までが書院出身者で世界に発信、ボーン賞を受賞したという。引き続き、「近代史の中の東亜同文書院」について國學院大學講師で書院研究者の栗田尚弥氏、「孫文と近代中国―日本・アジアへの視角」について電気通信大学名誉教授で孫文研究者の藤井昇三氏が話した。

愛知大学（武田信照学長）は、25日午後1時30分から同大学で木造の旧本館に開設した「東亜同文書院大学記念センター」の設立10周年で記念シンポジウムを開いた。

東亜同文書院大学は戦前、中国の上海にあった

愛大・豊橋校

出身者の多数が 日中主軸に活躍

東亜同文書院センター10周年で小崎氏

「書院出身者の活躍は、日中関係を主軸に各方面にわたる」と話す小崎氏。愛知大学記念会館で



顧問が「東亜同文書院出身者と日中関係」と題して講演したほか、栗田尚哉・國學院大講師らが書院研究、藤井昇三・電気通信大名教授が孫文研究の立場から研究成果を紹介した。

小崎氏は一九三二（大正十一）年、中国・青島に生まれ、東亜同文書院大学四十二期卒、愛知大学一期卒。外務省入省後、各国に在勤し、駐モンゴル大使、駐ルーマニア大使を歴任。

小崎氏は、孫文の国民革命を支援した山田良政・純三郎はじめ、同書院が一九〇四年から四五年

の間に四千九百余人が、日中関係を主軸とする官民各方面の第一線で活躍したことを紹介。

外交界では、「一期から毎年、数人が外務省に入り、日中外交史に大きな業績を残した」、学界では「中国問題の学者・研究家が多い」と、各十人ほど名を挙げながら説明。言論・報道界では中国問題に論陣をはった人たちが、実業界で東南アジアを舞台に活躍した人たちが多く、同書院出身者の多士落々ぶりを紹介した。

（杉浦文夫、家本浩太）

愛知大学東亜同文書院大学記念センター設立十周年記念シンポジウム「東亜同文書院の軌跡と

日中関係への展望」が二十五日、愛大豊橋校舎の記念会館講堂で開かれた。シンポジウムは、同センター

主催。愛大同窓会、遷友会、霞山会、同大国際学術センター共催。小崎昌業・霞山会特別

「東亜同文書院の
軌跡と日中関係」
あす愛大シンポ

愛知大の東亜同文書院
大学記念センターが設立
十周年を迎え、二十五日
午後一時三十分から、豊
橋市町畑町の豊橋校舎で
シンポジウム「東亜同文
書院の軌跡と日中関係へ
の展望」を開く。

化を通して日中友好を固
るために一九〇一年、中
国・上海で開かれ、のち
に大学になった。中国国
内を調査する「大旅行」
は独自の教育法として知
られていた。終戦で閉鎖
されるまでに約五十人が
卒業。一九四六年に教職
員、学生らが愛知大を設
立した。

孫文を愛した山田良
政、純三郎兄弟を筆頭
に、書院の関係者が日中
関係で果たした役割は大
きく、戦後も各界で活
躍。国交正常化前の日中
関係が冷え込んだ時代に
も友好の伝統を受け継い
できた。

センターは一九九三年
に設立。調査旅行の報告
書のほか、孫文や山田兄
弟関係を中心に写真や書
簡、掛け軸など百点を超
す資料を展示している。

シンポジウムでは、卒
業生で元ルーマニア大使
の小崎昌業さん、国学院
大講師の栗田尚弥さん、
電気通信大学名誉教授の藤
井昇三さんが書院の歴
史、孫文と近代中国につ
いて講演。当日はセンタ
ーの資料の説明会も催
す。

問い合わせ先は愛知大
1。電話0532(47)411

対中国策全面支持せず

東亜同文書院めぐり指摘

愛大シンポ

(丸田 稔之)

愛知大の「東亜同文書
院大学記念センター」設
立十周年を記念したシン
ポジウムが二十五日、豊
橋校舎で開かれた。

テーマは「東亜同文書
院の軌跡と日中関係への
展望」。

教員、学生など百人を
超す聴衆を前に、国学院
大講師の栗田尚弥さん、
卒業生で元ルーマニア大
使の小崎昌業さんが講
演した。

東亜同文書院は愛知大
の前身で一九〇一年、上
海で創立され、敗戦によ
り閉校となった。中国に
関する知識が豊富な卒業
生は、日本の植民地政策
に貢献したため、戦前戦
後を通じて「帝国主義の
先兵」などと、国内外か
ら批判を浴びたという。

栗田さんは「初代院長
の根柢一は中国の領土割
譲に反対だった。その精
神は学生に受け継がれて
いた」と指摘。書院の関
係者が国策を全面的に支
持していたわけではない
と主張した。

その反面、「中国の肩
を持ちすぎる」とも批判
され「学生、教員らは板
垣と関係が深く、苦境に満ち